

2019年2月21日

高等教育キーパーソン各位

地域科学 KKJ セミナーニュース 507

もう2年、まだ2年、どうする!!——

大学入学共通テストの事前検証と今後2

～ 大学の見識／高大接続の要点／民間英語試験の問題／個別試験の進化 ～

ご参画・ご派遣のお願い

【企画協力：学校法人 城西大学】

1月に実施された2019年度センター試験の受験者数は54万6千人余であり、現役生（19年3月卒業見込）の志願率は44%でした。利用大学・短大数を見ると、国立大82校、公立大90校、私立大531校、公立短大13校、私立短大136校となり、計852校で活用されております。

一方、近年のセンター試験の受験者を見ると、国公立大志願者層46%、私立大学専願者層27%、成績未利用層22%の3層構造となっています（2013年調査）。この大規模試験は学力や志向において多様な高校生に対応したものとなっているといえましょか？

（独）大学入試センターの運営資金は受験者の受験料でまかない、国庫からの補助金等は支出されておられません。全国の大学から、作問委員500人余、点検委員200人余の教員が年間50日にわたる作業に参画して、実現している機構です。まさに、大学関係者の貴重な精励によって、維持されてきたものです。まさに、独立法人として、大学及び大学団体の主体性と自主性をもっと発揮されるべき事態といえます。

今次の“高大接続改革”においては、“センター試験自体の検証作業”がないまま、つまり改革の根拠と必要性、実効可能性についての十全の検討が不十分なまま工程表に基づき強行されてきたという致命的な問題があります。2012年以降のトータルかつ緻密な政策評価については、荒井克弘氏の「高大接続改革の迷走」『検証 迷走する英語入試』南風原朝和編、岩波ブックレット、2018.6 刊）を是非ともご参照願います。

同論考の結語は、次のコメントとなっております。

—— 記述式も英語四技能テストも、教育を変えるためのカンフル剤だという説明は、もはや聞き飽きた。国民が納得できる説明をできないのであれば、それは公正ではない事情に依っていることになる。試験は教育の成果の、それも一部を測る道具にすぎない。試験で教育を変えることはできない。試験を恫喝の道具に使ってはいけないのである。

さて、本セミナーテーマの第1回は2017年11月に開催しており、そのキャッチは“たいへんだ!! このままでよいのか!!”でした。

今回は“もう2年、まだ2年、どうする!!”であります。さて、さて、貴大学の検討状況は？

「大学入学共通テスト」は、2021年1月に実施される運びです。「入学者選抜実施要領」により、各大学は「2年前予告」ルールで、この3月末までには、「予告・公表」が求められております。

本セミナーでは、賢明でよりベターな選択に向けた判断材料を提供すべく、4人のベスト講師をお招きしました。各氏の論展と質疑応答の場に、是非ともご参画くださいませ。

つきましては、ご多用の折とは存じますが、貴学のキーパーソン各位に、ぜひともこの機会にご参画・ご派遣を賜りますよう、お願い申し上げます。

また、ご関心の各位にご転送・ご案内いただけましたら、幸いです。パンフレット版は、下記よりご覧いただけます。

<http://chiikikagaku-k.co.jp/kkj/seminar/190314.pdf>